様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１３８０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０６５４

研究課題名（和文）就学前の低出生体重児母子の地域支援

研究課題名（英文）Community based support for low-birth-weghit children and motthers in preschool.

研究代表者
中島　俊思（Nakajima, Syunji）

浜松医科大学・子どものこころの発達研究センター・助教

研究者番号：９０５６８４９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：低出生体重(LBW)で生まれた子どもたちにとって、乳幼児期は発達のキャッチアップがみられる時期である。研究1では保育記録による発達尺度NDSCを用いて、LBW児の発達の特徴について検討を行った。2000g未満のLBW児群は、落着き・不注意・粗大運動において、BW群とは異なる発達を遂げることが明らかになった。研究2では、3歳児健診におけるLBW児の発達障害特性を検証した。LBW児のスクリーニングツールの陽性の割合は高く、対人・言語コミュニケーションでの苦手さが顕著にみられた。研究3ではLBW児の母親向けのサポートプログラムを開発し効果検討を行った。抑うつ、PTSD様症状の改善の効果がみられた。

研究成果の概要（英文）：Infancy is an important period for infants born with low birth weights(LBW) to catch up with adequate developmental levels. Study 1 investigated developmental tendencies of LBW-children using Nursery Teacher's Rating Development Scale for Children (NDSC). In regard to Hyperactivity,Inattention,and Gross-Motor subscale scores, LBW-children under 1999g showed different developmental characteristics from normal-birth-weighted (NBW) children. Study 2 investigated LBW-children's developmental tendencies in public health services for 3-year-old children. The results indicated that LBW-children were more likely to test positive for developmental disorders than NBW-children. Specifically, LBW-children showed salient defects in interpersonal and language communications.In Study 3,a group-program which supports for mothers with LBW-children was developed. and then the effects of the program were measured. The results showed that the participants alleviated depression and PTSD symptoms.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：低出生体重児　地域援助　発達障害　育児支援　保育園　乳幼児健診　ペアレントトレーニング

１．研究開始当初の背景

近年の周産期産科学・新生児医学の進歩により、低出生体重児（以後 LBW 児）の死亡率は大幅に改善し、全出生児において LBW 児が占める割合は増加している。本邦において 2000 年に単産で出生した新生児のうち、出生体重が 2500ｇ未満の LBW 児の割合は 7.4%、1500ｇ未満の極小低出生体重児（以後 VLBW 児）と超低出生体重児（以後 ELBW 児）はそれぞれ、0.5%と 0.2%であるのに対して、2009 年度には、LBW 児が 8.3%、VLBW 児が 0.6%、ELBW 児 0.2%と全体的に増加している(厚生労働省 2010)。

それにともない、地域の周産母子医療センターなどに、臨床心理士の配属を推奨するような試みが進められている。コメディカルの臨床心理学的なサポートとして、子どものみならず母親と子どもの関係性をはぐくむようなタッチケアやカンガルーケアといった援助の可能性が数多く報告されている。一方で、LBW 児に関して言えば、初期の NICU の母子の関係性の育みは、発達における土台にはなるが、将来の適応を約束するものではない。LBW 児は視覚認知の苦手さから図形認識など算数分野での学習が苦手とされる学習障害、および ADHD や ASD といった発達障害特性に関してもハイリスクであるという報告がされている。母親に関して言えば、罪悪感・罪責感、親役割意識の混乱など、さまざまな否定的な感情を継続的に抱きやすい。産科的リスクが非常に高い妊娠生活や出産を経験しているものも少なくなく、LBW 児を出産した母親が 抑うつ傾向・不安・PTSD 様の症状をしめしやすいことも報告されている（Kersting2004）。発達にまつわる母子の相互性は、近年の発達科学の主要なモデルでもある(Sameroff2004)。子どもの発達上のリスクは母親の不安傾向を増長させるであろうし、母親にネガティブな心理特性がある場合、養育者としての応答性が低下し、生来の子どもの発達上のリスクをより高める結果となる。すなわち母子双方から焦点を当てた包括的なサポートが求められる。医療現場において、新生児科では未熟児フォローアップ外来という形で、NICU 卒業母子への定期的な外来診療が行われてきた。本研究ではこのような従来の医療モデルに加えて、子どもの育ちと母親を地域レベルで支えていく地域中心型リハビリテーション [Commyunitey Based Rehabilitation；CBR] の可能性を探る。すでに CBR の理念を具現化している例として、未熟児母子を対象にした育児サークルのようなものも地域の保健所などに多々みられ。松尾（1994）は、幼児期後期から学齢期にかけてのサポートシステムの整備を喫緊の課題であるとしている。

研究①では保育園を低出生時体重児の母子への地域支援の基盤となるであろうと位置づけ、保育園入園後、3 歳から就学前の 6 歳までの LBW 児の園生活での適応状況を検証する。

研究②では、保健センターの乳幼児健診ですでに導入されている発達障害のスクリーニングツールによる、LBW 児の発達障害リスクに関する状態把握を健常群とのリスク率の算出から比較検討する。LBW 児グループの就学後の対人関係面で不適応を起こすものも少なくなく、適応障害を起こして初めて問題の大きさに気づかされることも少なくない。本研究では早期発見早期療育を目的に地域保健センターですでに乳幼児健診で導入されるスクリーニングツールによる全住民サンプルと、同時期に未熟児フォローアップ外来に参加する LBW 群との比較検証を行う。

一方、様々なリスクを抱える LBW 児を育てる母親にむけて、サポートプログラムが求められる。育児期の母親におけるメンタルヘルスや具体的な養育支援の技法としてペアレントトレーニングがあり、すでに発達障害児を持つ母親を対象にしたいくつかのペアレントトレーニングは、有効性が実証され普及している。LBW 児の母親間ではピアグループなども展開しているが、グループ援助技法としての効果は実証されていない。研究３では、発達障害を対象にしたサポートプログラムを改良し、妊娠・出産・NICU 入院生活といった、LBW 児の母親特有とされる外傷体験様の心理特性にも焦点をあてたグループサポートプログラムを開発する。事前事後で母親の養育感やメンタルヘルスなどのプログラム効果を評価し、有用性を検証した。

研究１「就学前の保育園生活における低出生体重児の発達の特徴　―保育記録による発達尺度（NDSC）の縦断データによる検討―」

２．研究の目的

保育園は、幼児期における LBW 児の発達把握と支援の場として、潜在的な機能を有している。中島（2014 印刷中）では一中規模都市の 13 公立保育園における一世代の LBW 児の発達適応状況に関して、標準化された発達適応尺度をもちい、横断的に検証した。「粗大運動」「微細運動」「身辺自律」などの運動領域に関しては比較的順調に階段状に標準体重（以後 NBW）児群との差異が縮まる一方で、「落ち着き」や「順応性」など適応行動領域において、年中時点で停滞減少が見られたりサンプル特性や環境変化によって強く影響を受けたりする可能性が考察された。これら研究の結果は横断的検証であり、①学年で見られた差異が個人間の差異である可能性を排除できない、②学年ごとのサンプリングの問題として性別の比率などが考慮されていない、③年少から年中・年長と学年が上がるにつれの個人内の成長や停滞が把握できない、などの点で解釈に限界が見られた。本研究では、年少から年長におよぶ個人内の

表1　出生体重×時期の分散分析の結果

	出生体重				時期					出生体重×時期			
	F (dfF = 1)	dfE	$p\eta^2$		F (dfF = 4)[1]	dfE	$p\eta^2$		F (dfF = 4)	dfE	$p\eta^2$	
落ち着き	3.85 †	482	.01	1 < 2	2.80 *	1928	.01	b < c	2.17 †	1928	.00	b, d, e: 1 < 2
注意力	5.37 †	496	.01	1 < 2	3.03 *	1984	.01	b < c	2.07	1984	.00	
社会性	2.96 †	459	.01	1 < 2	7.94 ***	1836	.02	b < c d e, d < e	1.27	1836	.00	
順応性	0.39	496	.00		4.28 **	1984	.01	b < e	0.08	1984	.00	
コミュニケーション	1.36	470	.00		10.14 ***	1880	.02	a < d e, b < c d e	1.01	1880	.00	
好奇心	3.39 †	429	.01	1 < 2	12.95 ***	1716	.03	a < d e, b < c d e, c d < e	0.42	1716	.00	
身辺自立	1.68	488	.00		7.60 ***	1952	.02	a b < d e, c < e	0.22	1952	.00	
微細運動	10.44 **	359	.03	1 < 2	25.84 ***	1436	.07	a b < c d e, c < e d, d < e	0.92	1436	.00	
粗大運動	19.29 ***	473	.04	1 < 2	6.59	1982	.01	b < d e, c < e	3.21 *	1982	.01	b, c, d, e: 1 < 2
総得点	2.33	318	.01		6.72 **	1272	.02	a < e, b < c d e, c d < e	0.91	1272	.00	

1: LBW, 2: NBW, a: 年少2月, b: 年中10月, c: 年中2月, d: 年長10月, e: 年長2月

† p < .10, *p < .05, **p < .01, ***p < .001

[1] 自由度は全てGreenhouse-Geisserの調整値を使用

変化を縦断的に追跡し、適応行動や発達の領域ごとの推移を検証する。本研究では、出生体重が2000g未満の低出生体重群(Low birth weight: LBW)、2500g以上の正常出生体重群(Normal birth weight: NBW)として設定し、2000gから2500gについては境界水準として分析対象に含めなかった。

3．研究の方法

（1）測定対象者および測定時期

A県X市の公立保育園全13園に通う年少から年長クラスの園児全員を測定対象とした。縦断データを分析対象とするため、以下の3世代分のデータを使用した。すわなち、20XX年度生まれ20XX+1年度生まれの、20XX+2年度生まれの子ども3年分のデータである。LBW児は27名、NBW児が1051名であった。

（2）　NDSC-Rと測定方法

NDSC-Rは、NDSC(Nursery Teacher’s Rating Development Scale for Children: NDSC)を改訂し作成した。尺度全体の項目数は94項目まで短縮された。NDSC-Rの評定者は、年長、年中、年少の各クラスを担任している保育士であった。

4．研究の成果

（1）尺度得点の比較

出生体重(2水準被験者間要因)と時期(5水準被験者内要因)を独立変数、NDSC-R下位尺度および総得点をそれぞれ従属変数とする2要因分散分析を行い、従属変数に対する各要因の効果量 $p\eta^2$ を算出した(表1参照)。出生体重の主効果についてみると、「落ち着き」、「注意力」、「社会性」、「好奇心」、「微細運動」、「粗大運動」において認められ、いずれもLBWよりもNBWの方が高得点であった。次に、時期の主効果では、全ての下位尺度および総得点において時期の主効果が認められた。下位検定の結果、全般的に、年少から年中、年長と時期が進むにつれて得点が上昇する傾向が見られた。ただし、「落ち着き」、「注意力」、「社会性」、「順応性」、「粗大運動」においては、年少2月から年中10月にかけて得点が変化しないか下降し、年中10月以降に得点が上昇する傾向が見られたのに対して、「コミュニケーション」、「好奇心」、「身辺自立」、「微細運動」、「総得点」においては、年少2月以降に得点が上昇する傾向が見られた。出生体重×時期の交互作用は、「落ち着き」(p < .10)で有意傾向がみられ、「粗大運動」(p<.05)において有意になった。そこで、各時期における出生体重の単純主効果の検定を行った。その結果、「落ち着き」においては、年中10月、年長10月、年長2月においてLBW < NBWであった。年少2月時点では見られなかった差異が、年中10月時点から見られるようになり、年中2月時点で差が見られなくなるものの、年長10月時点から卒園時までは差が再び現れて埋まらないことが示唆された。「粗大運動」においては、年中10月、年中2月、年長10月、年長2月、において、LBW < NBWであり、年少2月時点では見られなかった差異が、年中10月時点から見られるようになり、卒園時までその差が埋まらないことが示唆された。

各時期・出生体重における各尺度得点の平均値・標準偏差と時期ごとの出生体重による差の効果量(d)による検討から、全時期、全下位尺度において、LBW < NBWであったが、特徴的な推移として、「落ち着き」、「注意力」、「微細運動」、「粗大運動」、「総得点」のように、出生体重の効果つまり差異が年中10月時に顕著になり、その後もそれが維持されるものであった。特に、「落ち着き」、「注意力」、「粗大運動」においては、年長2月時での出

図1　NDSC-R”落着き”得点の推移

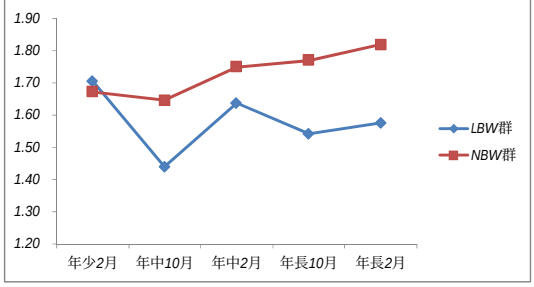
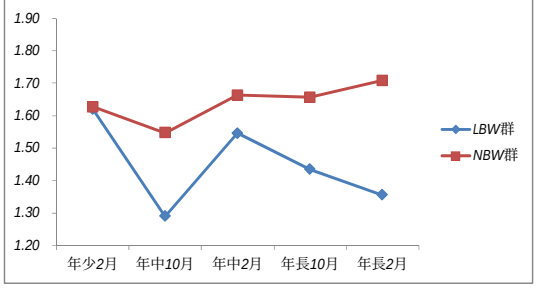


図2　NDSC-R“注意力”得点の推移



生体重による影響が大きかった(図 1 参照)。
（2）まとめ
本研究では個人内の発達的変化を考慮にいれた縦断研究の手法を採用し、LBW 児の保育園での発達の変遷を NBW 児の比較に基づき報告した。発達の推移は領域によって異なるものであり、年長 2 月時点でも LBW 児の苦手さが解消されない領域として、落着き、注意量、粗大運動、が見られた。3 つの領域に関しては学齢期の適応にも関連すると同時に、医療的リスクなどの個人内要因にも左右されることが知られている。また年中 10 月において、年少時よりも得点が低くなるような停滞および後退現象が見られた。停滞現象自体は、NBW 群で見られたように、一般的な発達のプロセスにも見られる傾向であるが(大西 2011)、LBW 児の場合は、この停滞および後退現象が NBW 児よりもよりはっきりとより持続的に見られていた。

研究２「PARS 短縮版を用いた LBW 児の自閉症スペクトラム特性の把握」

２．研究の目的
乳幼児期の VLBW/ELBW 児の社会的発達に関して、共同注意などの指標からの検証が盛んになされてきた。もともと VLBW/ELBW 児の自閉スペクトラム障害の出現率は標準体重群の出現率に比して 3～5 倍と高いことが知られており(Schendel 2008, Jannifer 2011, Buchmayer 2009) 、昨今は未熟児フォローアップ現場においても軽度発達障害の問題が取りざたされている (金澤 2007)。VLBW/ELBW 児に関しては、3 歳以降にはキャッチアップも起こる時期であることが見込まれるため、1 歳 8 ヵ月の時点で VLBW 児が苦手とするが指さしといった共同注意行動の特定の行動様式は、既に会得しているであろうことが見込まれる。一方で共同注意行動自体は他者の意図理解などとのコミュニケーション領域の適応とも連続体であるため、なんらかの対人コミュニケーションスキルの苦手さとして 3 歳時点でも残存しているかもしれない。以上を踏まえ本研究では、36 ヵ月時点において、VLBW/ELBW 児の発達障害特性、すなわち言語発達や社会性発達および自閉的行動を総合的に把握することを目的とする。3 歳児乳幼児健診に参加した NBW 児の全数データを統制群とする。また LBW 児特有の傾向をより発達障害の診断を受けた ASD 群との比較検証も行う。

３．研究の方法
（1）調査場所・対象者
VLBW/ELBW 群は、東海地区 A 病院総合周産母子医療センターの、未熟児フォローアップ外来参加した 39 名を対象。統制群は、20YY 年 9 月から 20YY+1 年 3 月までに X 市保健センターの 3 歳児健診に参加した 590 名のうち、同意した 486 名(%)(男児 238 名、女児 227 名)を対象。。ASD 群は、PARS 開発時に全国各地域で聴取した 309 名のうち欠損値のない 302 名を分析対象とした。
（2）測定器具
①PARS 幼児期短縮版
安達ら(2008)によって開発された PARS を採用。中でも最も PDD の識別力が高い、12 項目から構成幼児期尺度の短縮版を使用。10 分程度の保護者への面談を開始、各項目に示された行動の見られる頻度を、なし(0 点)、多少目立つ(1 点)、目立つ(2 点)の 3 段階で評定
②PARS 短縮版評定の手続き
VLBW/ELBW 群は、臨床心理士による、PARS 幼児期短縮版の面談を行った。NBW 群は保健師が評定した。

４.研究の成果
（1）PARS 短縮版陽性児の割合
LBW 群と NBW 群の PARS 幼児期短縮版の陽性児の割合を検証した。陽性児は LBW 群で 21 名(53.85%)、NBW 群で 40 名(8.58%)であり、($\chi 2(1) = 69.42$, $p < .01$)で、LBW 群が統制群よりも有意に高い陽性率を示した。LBW 群のリスク比は統制群の 6.27 倍あった。
（2）PARS 短縮版の項目ごとの分散分析
PARS 幼児期短縮版の合計得点と項目ごとに、NBW 群・LBW 群・ASD 群の 3 群間で一元配置分散分析を行った。合計得点で、有意な群の主効果($F=1010.60, p<0.01$)が得られた。またすべての項目で $p<0.001$ の有意な主効果が得られた。PARS 幼児期短縮版の各項目と合計得点における多重比較 Tukey HSD の結果を表 2 に示す。LBW 群と NBW 群の比較では、1.呼びかけへの振り向き、2.視線、6.言葉の遅れ、7.会話の持続、9.オウム返し、10.ごっこ遊び、11.他児への興味で、LBW 群が NBW 群よりも高い有意な差が見られた。LBW 群と ASD 群との比較では、11.他児への興味のみ、有意な差が見られなかったが、それ以外の項目と、合計得点($d = -3.88$, $p<0.01$)で LBW が ASD 群よりも低い有意な差が見られた。

表2　PARS短縮版各項目における3群間の事後検定

	LBW群-統制群			LBW群-ASD群			ASD群-統制群		
	効果量d		有意確率	効果量d		有意確率	効果量d		有意確率
1. 呼びかけへの振り向き	0.58	**	0.001	-0.73	**	<0.001	1.36	**	<0.001
2. 視線	0.56	**	0.005	-1.04	**	<0.001	1.76	**	<0.001
3. 指さし	0.36		0.296	-0.98	**	<0.001	1.58	**	<0.001
4. 質問の繰り返し	0.29		0.149	-0.61	**	<0.001	0.95	**	<0.001
5. 状況の変化による混乱	0.29		0.174	-1.30	**	<0.001	1.84	**	<0.001
6. 言葉の遅れ	1.04	**	<0.001	-0.80	**	<0.001	1.88	**	<0.001
7. 会話の持続	0.82	**	<0.001	-0.61	**	<0.001	1.45	**	<0.001
8. 一方的な会話	0.22		0.318	-1.40	**	<0.001	1.84	**	<0.001
9. オウム返し	0.45	*	0.016	-0.47	**	<0.001	0.94	**	<0.001
10. ごっこ遊び	1.10	**	<0.001	-0.43	**	<0.001	1.38	**	<0.001
11. 他児への興味	0.69	**	<0.001	-0.18		0.286	0.79	**	<0.001
12. 同じフレーズの繰り返し	0.12		0.749	-1.03	**	<0.001	1.36	**	<0.001
合計	2.52	**	<0.001	-3.88	**	<0.001	6.78	**	<0.001

** は 1% 水準で有意 (両側)
* は 5% 水準で有意 (両側)

（3）まとめ
VLBW/ELBW 児は陽性児の割合が 53.85%と高く、リスク比も 6.27 倍と高いことが明ら

かになった。3 歳時点のフォローアップ外来に参加したのは 1500g 未満の LBW 児の中でも全般的にやや未熟性が強く発達のリスクが強いサンプル特性も一因と考えられるが、発達障害特性に関してハイリスクであるといえる。項目ごとの検証では、対人コミュニケ―ションや言語コミュニケーションに関する項目群で苦手さがある一方、エコラリアや場面へのこだわり等で NBW 群との差はみられないなど、診断を受けた ASD 群とはややことなる特徴を有することが読み取れた。一方で、同年齢集団からの回避傾向は ASD 群と同等に見られ、VLBW 児の特有の発達特性であるといえる。今後の発達の経緯を詳細に追跡していくことが求められる。

研究３ NICU 入院経験のある LBW 児の親向けサポートグループプログラムの開発と効果測定

２．研究の目的

VLBW 児の母親は、切迫早産などの特殊な妊娠生活や出産体験、児の NICU 入院による長期の分離体験などから、VLBW 児の母親は PTSD 様の症状を示す率が高く(Holditch 2003)、産後うつの傾向が強く(長濱 2004, Vigot 2010)、VLBW/ELBW 児の母親は、1500ｇ以上の LBW 児の母親に比べて抑うつ傾向が持続し改善されにくい。VLBW 児母子の場合は、先述の初期からの母親の主観的体験のつまずきとメンタルヘルス上のリスクと、研究②のように VLBW 児自身の特有のコミュニケーション領域での困難さが同時に重複しているためにハイリスクであると考えられる。母親のみならず LBW 児の発達予後をサポートするという目的からも、母子双方に同時に焦点化した支援技法の開発が求められる。

以上を踏まえ本研究では、臨床心理学領域における VLBW 児や母親への援助手法として、短期グループサポートプログラムを開発しその効果を測定することを目的とした。プログラムでは、１つに抑うつ傾向といった母親のメンタルヘルスの改善、２つめに VLBW 児の子ども特徴や行動理解などより詳細な特性理解を深めること、をプログラム開発のねらいとする。さらに 3 つ目に PTSD 様の症状の改善を新たなねらいとして加えた。

３．研究の方法

（1）場所・実施期間・参加者

東海地区の A 総合病院にて実施。20ZZ 年 10 月～12 月までに 60 分×6 回のベーシックプログラムを実施。フォローアッププログラムは、ベーシックプログラム終了後から一カ月後の X+1 年 2 月から計 2 回実施。参加条件として、①20ZZ＋1 年時点で就園予定の 3 歳児から 2 歳児以上、②出生体重が 1500g 未満の VLBW/ELBW 児の保護者、を設定。参加希望で葉書返送の 10 組を対象とした。

（2）プログラム内容と構成

前半 6 回のベーシックプログラムでは、辻井（2014）が開発したペアレントプログラムを活用した。後半 2 回のフォローアッププログラムでは、母親同士で、妊娠・出産・NICU 入院を振り返り母子双方の成長点を共有しあう、ピアカウンセリングの要素を中心に構成された。親向けのプログラムに並行して、該当児に対する託児を別階別室で実施。

（4）評価方法・測定器具

PT 参加者にアンケートの趣旨をその都度説明した。事前調査(ベーシック開始直後)と、事後調査（ベーシック終了後）、フォロー調査（フォローアップ終了後一カ月後）に実施。子どもの関わりをしる①養育スタイル尺度、抑うつ傾向を把握する②BDI-Ⅱ（ベック抑うつ質問票第二版）、PTSD 様の症状を把握する③IES-R（Impact of Event Scale-Revised: 改訂版出来事インパクト尺度）を用いた

４．研究の成果

（1）グループ参加母子の概要

10 名のグループへの出欠状況とメンタルヘルス指標の事前評価の結果を表 3 に示す。プログラム効果の分析では、プログラムへの継続参加への効果を検証するため、ベーシック 6 回+フォローアップ 2 回の計 8 回のうち、6 回以上出席したものを分析対象とした。メンタルヘルス指標の傾向として、BDI は G が

表3　グループへの出席状況と参加時のメンタルヘルス指標

		1回	2回	3回	4回	5回	6回	F1回	F2回	合計	BDI得点	IES-R得点
分析対象	A	●[1]	●		●	●	●	●	●	7/8	11	7
	B	●	●	●	●	●		●	●	7/8	14	12
	C	●	●	●	●	●	●	●	●	8/8	12	3
	D	●	●	●	●	●	●	●	●	8/8	18	20
	E	●	●		●		●	●	●	6/8	12	39
	F	●	●	●	●		●	●	●	7/8	13	1
分析除外	G	●	●						●	3/8	35	65
	H		●	●	●			●	●	5/8	6	6
	I	●			●	●		●		4/8	―	29
	K	●	●			●	●			4/8	16	―

[1] 出席を●で表現

図3　IES-RとBDIの得点の推移

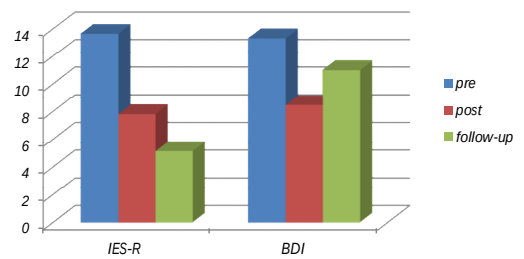
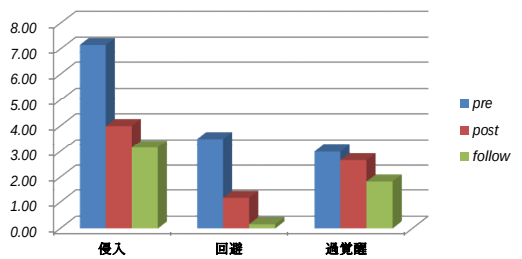


図4　IES-R下位尺度得点の推移



35 点と高く、専門家の援助が必要な重いうつ状態に該当した。臨床支援の基準となる 17 点を上回る母親は G を除いて見られなかった。IES-R では、D、E、I の 3 名でカットオフポイントの 25 点を上回り、全体の 30%に相当した。

（2）効果測定の結果

各指標の結果を図 3 図 4 に示す。pre・post・follow の 3 時点の各指標に関して、被験者内要因の分散分析を行った。メンタルヘルス指標においては、IES-R 得点(F=6.28,p<0.05)と BDI(F=5.02,p<0.05)において時期の有意な効果が得られた。平均値の推移より、IES-R の得点はベーシックプログラム終了後に減少しフォローアッププログラム終了時にさらに低下しているのに対して、BDI の得点はベーシックプログラム終了時点の得点が最も低くフォロープログラム終了時点では再度増加しているが明らかになった。IES-R の下位尺度別では、侵入(F=6.09,p<0.05)、回避(F=4.94,p<0.05)において有意な時期の効果が得られ、過覚醒症状には有意な効果は見られなかった。

（3）まとめ

抑うつ傾向では、ベーシックプログラム終了後に最も低下し一定のプログラム効果が見込まれたが、フォローアップ時には再度上昇していた。抑うつ傾向が一定期間が過ぎれば再上昇しやすい傾向があり、より継続的なサポート体制やプログラム構成が求められる。PTSD 様の症状に関しては、ベーシックプログラム終了後に有意に低下しフォローアップ時にはさらに低下していた。中でも再体験・侵入症状や回避症状が大きく改善していた。PTSD 様の自覚症状を示す母親の割合が 10 名中 3 名で 30%と高いことを踏まえると、今回のプログラム効果は意義深い。本研究のサポートグループプログラムの対象年齢帯を就園前の乳幼児期後期に設定したが、より育てにくさや躓きが顕在化してくるような就園後や就学後においても、子育てに関するサポートプログラムの開発も求められる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 中島俊思・岡田涼・松岡弥玲・谷伊織・大西将史・辻井正次、発達障害児の保護者における養育スタイルの特徴、発達心理学研究、査読あり、第 23 巻、2012、P264-P275.

② 中島俊思・伊藤大幸・大西将史・高柳伸哉・大嶽さと子・染木史緒・望月直人・野田　航・林陽子・瀬野由衣・辻井正次　、３歳児健診における広汎性発達障害児早期発見のためのスクリーニングツール PARS 短縮版導入の試み、精神医学、査読あり、第 54 巻、2012、P911-P914.

③ 中島俊思・野田航・辻井正次、乳幼児健診における発達障害の客観的スクリーニング方法導入の意義と可能性、月刊地域保健, 査読なし、東京法規出版、1 月号、2013、P49-P61.

④ 中島俊思・大西将史・伊藤大幸・野田航・望月直人・高柳伸哉 ・染木史緒・大嶽さと子・瀬野由衣・林陽子・辻井正次　、３歳児健診における保健師による PARS 短縮版活用の可能性と課題、小児の精神と神経、査読あり、第 53 巻、2013、P47-P57.

⑤ 中島俊思、特集：発達障害児者の支援　乳幼児健診において発達相談から療育にどうつなげていくのか、臨床心理学、査読なし、第 14 巻、2014、P181-P185.

⑥ 中島俊思・大西将史・伊藤大幸・高柳伸哉・野田航・原田新・田中善大・望月直人・大嶽さと子・辻井正次、就学前の保育園生活における低出生体重児の発達の特徴―保育記録による発達尺度（NDSC）の横断データによる検討―、小児の精神と神経、第 54 巻、2014、印刷中

〔学会発表〕（計２件）

① 中島俊思、人口 8 万人規模Ｘ市での乳幼児健診における新スクリーニングツール導入のこころみ―保健師のスキルアップ・心理士からの役割委譲を念頭に―、小児精神神経学会第 107 回、2012 年 6 月 16 日　　、東京

② 中島俊思、発達障害児早期発見・早期支援のための大規模縦断調査研究からの報告③　―スクリーニングツールを導入した X 市乳幼児健診の参加児と就園後の縦断フォロー、日本心理臨床学会第 32 回大会、2013 年 8 月 26 日、横浜

〔図書〕（計１件）

① 中島俊思、金子書房、発達障障害者支援とアセスメントに関するガイドライン事例 2, 乳幼児健診から療育機関につながった ASD 以外の発達障害のケース、2014、P322-330、

６．研究組織

(1)研究代表者

中島　俊思（Nakajima　Shunji）

浜松医科大学子どものこころの発達研究センター・特任助教

研究者番号：90568495